

“いごっそう”の文学

宮尾 登美子

—受賞作「權」をめぐって—

今回太宰賞を受賞いたしました「權」という作品は、私の一族をモデルに書いた小説なんで、これを書きますにあたりまして、私は非常にうれしい思いもいたしました。決心してふみきるまでに、わりと長い年月がかかったわけでございます。今は「小説を書くのはコンプレックスで書く」という言葉がございます。昔は、作家はたかさんのコンプレックスを持っている人がものを書くということでございます。

ございました。というのは、昔の女流作家というのは病弱であるとか、それから器量が悪くてお嫁に行けないとか、たくさんコンプレックスがございます。書いておりましたようなわけですけれども、世の中が富んでまいりましてからは、今の作家はそういうコンプレックスがほとんどなくなっております。

私は地方者のひがみでいうわけではございませんけれども東京に住んで親からの財産を受け継いで、別に働かないでもいい人たちが大学に行つて、ゆつたりと勉強しながら小説を書いていくというタイプの人が非常に現在では多いわけなんです。いまは女流作家の中にもけっこう美人もおりますし、小説も書かないでいい豊かな家の奥様が小説なんか書いている。なにが不足で小説なんか書くのだから

う、という世の中になりました、だんだん小説がいけなくなってきたということが言われております。二十世紀は小説が駄目な時代だ、というのはみなさん、富める時代ですからだんだん人間にコンプレックスがなくなつて、その中のコンプレックスを持つて人間が非常に稀少価値がある、というわけなんです。

そういうことを私意識した訳ではございませんが、私が生まれた家が非常にいやしい職業であると、私、長い間恥部としておりました。本当に私の家が紹介業であるということをこうして口にするようになりましたのは、ごく最近でございます。学校時代なんかどれだけそれについて恥しい思いをしたか、一例をひきますと、小学校の遠足なんかで学校の行列が家の前を通るということを聞きますと、恥しくてその遠足を休んだりした訳でございます。私が大変いやだったのは、この紹介人の手数料が割合高うございまして、それは私の小説をお読みになつていただきますと克明に書いてございますけれども、紹介業の手数料というのは女の身売りの金額の一割いただけるわけなんです。そのころ年季奉公、つまりこの身売りしたお金が、大昔のことでございますけれどもだいたい四年、

五年ぐらゐの年奉公で一人が千五百円から二千円っていうふうな値段で人身売買される訳ですけれどもその中の一割が紹介人の手にはいるわけなんです。で二千円の子供を一人で扱いますと、二百円という手数料ははいる。その当時どれだけ生活費があれば足りるかというのと、こういう裏町の生活で月に五円もあれば食べて、お家賃を払ってまあまあだん着くくらいは買えるという生活でございました。主人公の岩伍っていう人は高知の紹介人の中では紹介人の組合長もつとめて、仕事が一番多かったわけですからお金がもう潤沢にはいってくる。それで私もほんとに恥ずかしいことですけれども物質的に割合と豊かに育てられたわけなんです。そういう人たちの身売りの上前をはねて自分だけ女学校にいった方がいいものを食べてくらすという生活が私の長い間の恥部でございました。

そういう人にも話せないことを長い間胸にあたためておきましたけれど、考えてみますと、それだけに非常に私の激しい思いでもあるわけでございます。ですからこの激しい思いをぶつけて書くのが、作家としての基本的な姿勢じゃないかというふうになふみきりまじったのが、これを書くきっかけになりました。この岩伍という紹介人につきましては資料が非常に乏しいわけなんです。先ほども申しましたようにこの紹介業というものは今は全然ございませんし、それから当時の県の条令でもっているんな規則が定められておりましたから、資料についてはほとんど残っておりませんでした。この岩伍という人は、生家が没落いたしましたために、小学校に二十七日しか行っておりません。無学文盲の男でございましたけれども、自分で発奮いたしましたして、字を覚えて書くことが好きでございましたとずっと日記をつけておりました。この岩伍のモデルとな

った私の父は、昭和二十六年、私の二十四歳のときに亡くなりましたが、父の書斎を捜しましたら、日記がございましたので、そっくりもらってきて、おいてあったわけです。それをあけてみますと自分の仕事のこととか、取り引き先のこととか、日常のいろんな感慨というふうなものを書いてございましたので、私、大いに助かりまして、この日記の中からその岩伍像をかためていったわけでございます。

女主人公の喜和といえますのは、私に取っては血を引いておりません育ての母でございます。この母が、いまだに毎晩、夢をみるくらい、したわしい母でございます。この母だけは、この小説の中で理想像として、書きたいという風に考えて、喜和だけを大事に大事に扱ってきたわけですが、母というのは大麥ナイーブな感性の持ち主でありました。こういう風な水商売にはいりまして、女の人というのは、割と順応性のあるものでもと素人の出身でございます。でも、家が水商売で、そこのおかみさんになりますと、もうすつかりその世界の水にそまって女人になってしまうのでございます。けれども、喜和は死ぬまで素人でございます。岩伍にこういう水の商売はやめてくれとときどき願ったりするだけに非常に純粹なところがあつたわけですね。作品中の健太郎といえますのは、つまり私の兄にあたるわけです。健太郎と竜太郎は、喜和の妻子さんでございます。これは男の子であつたせいか、喜和はあんまり接触しなくて、私を非常によく可愛がってくれたわけなんです。もう四十、五十のおかあさんが、子供と遊んでくれるというところは、その頃、大変珍しいわけです。今でこそ育児っていう分野が大きくとり上げられていますけれども、昔の人間は子供はほっておけばいい

と、第一育児なんという言葉からしてなかったわけなんです。子供は、産んで、お乳を与えて、おむつをかえておけば、一人で育つという考え方があって、子供に手をかける親は、かえって、世間から笑われたものでございます。にもかかわらず、この喜和という人は大きくなるまで私とはよく遊んでくれてその頃母から教わりましたいろいろな遊び、たとえばリリアン編みだとか、毛糸編みだとか、糸とりだとか、それから、菊をむしってきて菊板を作ることだとかそういうふうなことが私、やはりなつかしくてこの母のことを本当にしたいわしく思っているわけなんですけれども、こういう母への思慕が、私にこの作品を書かせたといえそうでございます。

今回受賞しました第一部に第二部を加えて「權」の上巻として、まもなく本が出ます。この作品は御存知かもしれませんが、出ました時にわり合い反響が大きくて、いろいろな批評家の先生方にもとりあげられ、「展望」の七月号に審査員の先生方の講評も載っておりますからそれをお読みになった方がおありになるかと思えますけれども、批評家の先生方が、手織り木綿のような文章で古い手法で古い言葉を使って書いた小説というふうなことを書かれてあった訳です。それは得た言葉だと思えます。舞台が明治から昭和の初年でございますので意識して古い言葉を使いました。でもただ一つ言えることは、読者を全然想定しなかったわけです。私、土佐の「いごっそう」でございます、頑固者ですから若い人たちに迎合するのがとていやなんです。

私は自分が書くこうと思ったものでなければ書きたくないですから、自分の心の中にある激しいものをぶつけるようなふうに、あるいは母親に対する思慕、そういうふうなもので書きましたので古い

言葉で、読者にわかってもらわなくても書いた訳でございます。

私は大変古いものが総体的に好きなのでございまして、どうも若い人達というのはわかりにくい部分が多々ございます。そして小説を書く上では私のプラスになるものがわりと少ないというふうな面がございまして、それではなにが私に対してプラスになるかと申しますと、人間の中で申しますとやはり老人でございませぬ。つまり伝統を積み重ねてきたものに非常にひかれる訳なんです。毎日の新聞を見ておりましたが、たとえば朝日新聞の「ひととき」欄というふうなものを読みましても、年輩の方ですとおっしゃる内容に一つの重味がございますね。その他、何か学びとるものがある。それは五十年、六十年と生きてきたそれだけの年月がさせる、そういうふうなものの魅力で、今もお年寄りの方と話し合うのが楽しみでございます。それと同様に古美術、古典芸術、それから伝統工芸というふうなものが好きで調べてみたいと思えます。実はこの間、北陸放送の仕事で、手すきの和紙ですね、紙すき、それから木彫りの欄間、富山がこれは名物でございますけれど、それから金沢の白山つむぎという三つの取材を私に頼んできたわけで、その時たいへん忙しかったんですけれどそういうものが好きでございますから、金沢に行ったわけなんです。結果としては、過労でもって向こうで倒れて入院なんかいたしましたけれども、でも行ったかいがございましたんですよ。もう今は珍らしくなった手で紙をすくのを見せていただいたりして、もうたいへん参考になったんです。それから白山つむぎといえますのは、昔ながらの蚕をかって糸をとり、その糸によりをかけて、もう八十のお婆さんが手でハタをおり、それから欄間っていいものはなんと天正時代から十六代も続いたおじさんが

こつこつと桶をのみ一本で彫つてる。その執念といえますか、その伝統といえますか、そういうふうなものが私、たいへん好きなのでございまして、この小説の中にも今は失われた土佐の風物、そういうものを書き残しておきたいという気持ちもございまして。ですから小説の中の固有名詞はほとんど実物をつかつております。これはたいへんうしろめたいんでございまして、人の名前を除いては町名であるとかほとんど固有名詞をつかいましたので、地元の高知新聞にことわりの手紙を出してみなさんの了解を得たわけなんですけれども、それは反響がございまして、たとえば鉄砲町、こういう町の名前がなつかしくて書いたわけなんですけれども今は鉄砲町も桜井町という名前にかわっているから小説の中に残しておいてよかったというふうな読者の反響がございました。それでこの中にはいっぱい方言を使っています。おわかりにならない方が多いと思います。事実、私のところにジャーナリストの方なんか取材にみえて、宮尾さん、この中でみそこしってあるの何ですか、みそこしというのはこれザルのことなんです。私、土佐だけかと思いましたが、唐木順三先生がおっしゃるには、東京でも昔はザルと言ったんだよとおっしゃってましたから、御年輩の方はわかるかもしれません。でもこの小説の中にザルと書きますとこれはもう大正時代の土佐ではないのです。そこで人がわかろうとわかるまいと「みそこし」という言葉全部使ったわけです。当時使っていた言葉、それを私の記憶で呼びもどして、この小説の中に埋め込みましたわけでございます。

方言をなぜよくつかいましたかということももう一つ理由がございまして、土佐の方言というものを調べておりますうちに土佐のアクセントとか方言というふうなものは関西系でございまして、どち

らかと言えば大阪弁に似ております。文楽浄瑠璃の床本を開いてみますと、床本といえますのは、浄瑠璃語りの方が実際に昔の古典を自分のうたいやすいように時々流動的にとりかえてゆくものですが、その中に当時使った言葉というものが生きているわけですね。

ご存じかもわかりませんが、「菅原伝授手習鑑」や「艶客女舞衣―三勝半七」とかそういうふうなものの中に、土佐の方言が出てくるわけなんです。ですからまんざら根拠がないわけではないと思つてこれに使わせていただいたわけでございます。それからまた漢字が非常にむずかしくて読みづらいとこれはもう大変批判をうけているわけですが、若い人たちから「広辞苑の中にある漢字なら字引をひきながら読めるんだけど宮尾さんの広辞苑の中にはないよ」っていうことをいろいろ言われるわけです。私、森鷗外の商品が大変好きでございまして、鷗外の史伝書を読んでおりますと、この鷗外という先生わりと勝手な字の使い方をしております、たとえば元来という言葉がありますね。漢字にしますと、ゲンという字にクルと書くのですが、鷗外の、たとえば「大塩平八郎」とか「波江抽斎」とかそういう史伝書の中には本来と書いてグアンライと仮名をふつてある。ハハ先生も自分勝手に使つていらつしやるなど思つたわけなんです、私も意を強くしていろいろとむずかしい字を書いたわけですね。

それでたとえば審査員の先生とかいろいろな方があなたは年にはにあわない古い物を書く、だいたい私のこの小説をお読みになった方がいっただいこの作者はいくつであろうかと論議的になつたそうでございます。唐木順三先生が「私は六十五歳だと思ふ。」白井吉見先生は「いやこの人は四十代だ。」ということと賭けたそうござい

います。で唐木先生のおっしゃるには、「柳行李に着物をつめて下さぎ波のような模様がついてるなんて書いているのは、これはもう六十の婆さんでないとわからないよ。」と。ところが臼井先生は「いやいや、この中の感性のみずみずしさっていうものは年寄りでは、もう枯れてしまったんでは書けない。」というので、「あなたが四十代であって僕が勝ったよ。」っておっしゃったんです。それでどういいう人から影響をうけたか、というふうなことをたいへん聞かれたわけなんです。

私、ずうっと小説修業というものを一人でやってまいりまして一度も同人雑誌にはいったことほございません。同人雑誌にはいるとそれはいいのですけれども、私が小説を書きたいと決心いたしましたのは、年にして二十前後でございました。私ちょっと満州に行っております、引き揚げて帰ってまいりましたのが昭和二十一年でございますから、年令で二十歳でございます。その時なぜ書きたいと考えたかと申しますと、満州での私の体験が本当にすごいことだったわけですね。今はもういっばいこの種の手記みたいなものが出ておりまして、むこうの開拓団の悲惨な状況とかソ連人に凌辱された女の人の話だとか珍らしくございませぬけれどもその頃、私の体験というのは非常にショックだったわけなんです。それで引き揚げて帰ってまいりまして、これを書かなければと思ったのが小説を書きたいと思った初めてでございます。でもさっき申しましたように、私、結婚はようございまして、子供は養わなければならぬし、主婦ではあるし、家が農家だったので、それから務めも持っておりましたので非常に八面六臂の働きをして、最近までやってきたわけなんです。それで小説修業をしたいと思っても、そういう同人雑誌

の集まりに行けないという時間的な制約がございましたもので、ずっと一人でやっておりました。結局私が何をお手本にしたかといえますと、私の読みました物の中で非常に好きな作品、感銘を受けた作品でございます。といいますのは、プロ作家、職業作家になりまして、年がら年中力作ばかり書いているわけにはまいりません。たまにはふざけたもの、イージーなものを書いたり、力を抜いたものを書いたりいたしますね。その全集を読みますと、これはあんまりたいした作品じゃないなというのがやはり一つ二つ出てまいります。そういうのを讀みますと私はちょっとガッカリいたしました、この人が好きだという作家よりも、好きな作品ということでそれをお手本にしてやってまいりました。

私の好きな作品といえますのは、古典の中では源氏だとか伊勢だとか、そういう仮名文字の文学よりも、もう大変お転婆でございませけれども、太平記だとか保元、平治だとか平家だとかそういうふうな戦記文学が大変好きでして、そういう漢字のものによりひかれたわけでございます。それから漢籍も非常に好きでございまして、唐代の詩人よりも下って宋代の蘇東坡という詩人の書いた散文がわりと好きでございまして、それはしよっちゅう机の前に置いて今も読んでいますのでございます。こういうものから割といろんなものを学んだように思います。現代作家の中でどうしても一人をあげてくれ、好きな作品をあげてくれといわれますとやはり井上靖さんの作品の中で、これも全作品ではございませんが「風濤」ですね。元寇の蒙古襲来のことを書きました「風濤」それから「おろしや国酔夢譚」とかそれから「敦煌」「楼蘭」それから「蒼き狼」と、そういうふうな男っぽい小説が好きでございます。女の中で誰かをあげて

くれといえますと、私は今はあまり評価されませんが、林芙美子の作品が好きでございますね。彼女は本当に体当りで書いた、体で小説を書いた作家でございます。私といたしまして小説は体で書くものだというふうなことは感じております。その意味で林芙美子の「晚菊」っていう作品、大変好きでございます。そういうふうなものからわりといろいろ学んだように思いますね。

それでは次にどういうふうにして「權」を書いたかということをお話し申し上げます。実は受賞直後に婦人公論に私、手記を続けざまに二つ書きまして、わりと長いものがございますのでお目にとまったかもしれません。最近、同じ婦人公論の十二月号に七三年女性ワースト十というのがございます、その中の私ベストテンに入ったようでございます。で私のタイトルが何とふるっておりまして、「石の上にも十年」というタイトルなんでございます。結局私の娘達に言わせると、バカの一徹のことよねえっていうんです。本当に石の上に十年というのはバカの一徹なんでございますね、それはなぜ十年かといえますと、最初私が婦人公論の女流新人賞をもらいましたのは昭和三十七年、これは「連」という小説でもらいました。それから今度の太宰賞をもらいましたのが今年でございますからちょうど十年たっております。ですからタイトルも「石の上にも十年」というタイトルになったのだと思えますけれども、その十年の間、私がどうしていたかという、これは私事になりますけれども、ちょっとお話し申し上げますと、私三十七年の受賞のあと高知におりまして、新聞小説など連載して、しばらくは作家生活みたいなことをしていたわけなんです。その後、離婚いたしましたので、それからまたしばらくして、今の結婚というふうな身辺上の変

化もございまして、昭和四十年という年が精神的にも経済的にも一番自分の生涯の中でつらい年だったのではないかと思います。こういう人間が逆境に陥った時に皆さんならどういたしますか。信仰を持つている人は、私は祈るんだと思います。自分の心の中に神をもっている人は祈ると思います。私は自分では信仰を持っておりませんで、そういう時に、何に祈るかといえますと、今申しましたように亡き父・母というふうなものに祈る他ございませんでした。結局祈るような気持ちで書きましたのが、この「權」の一番母体になりました下書きでございます。で毎日／＼苦しい事があるたびに、私は机の前に向かって父を思い出し、母を思い出し、こういう事はちょっと私、めめしい感じでお恥ずかしいですけれども父を思い出し母を思い出し書いたのがその第一稿になったわけでございます。この「權」の完成した原稿というのは終りまで書きまして千枚近い大作になるのでございますが、この昭和四十年の暮に書きました「權」の初稿は三百枚であがっております。これ本当に小説とはいえるようなものでございせんので、ただ私が本当に心のままに父に祈り母に祈りして書いたものが、この初稿になっております。これをもって私は昭和四十一年に東京に引越してまいりました。

それでその後、去年の暮れまでつまり四十一年から去年の暮れまで、ずうっと会社に勤めておりましたかたわらその「權」の原稿をもつてたわけですね。それで結局それをいじって書いて書き直し、書き直ししているわけなんです。私は書くという事は一種の習慣になっておりますから別に、気張って書かないでも、ひとりだに机に向かうようになっていまして、私体が元来あんまり強くございせんので、お

勤めをいたしませんと夜書とか、朝早く書くとかいうことが体力的に全然できないのでございます。ただ、幸いなことには私が勤めておりました会社は早くから週休二日制をとっておりましたので、土曜、日曜をこの執筆時間にあてたわけなんです。と申しまして、主婦でございますから日曜日は家事という義務がある。ですから土曜日、一日一生懸命朝から晩まで机に向かって、少しずつ少しずつ直して直して、この「權」を磨いて磨いて今のようなものにしていったわけでございます。

それで、この勤めといえますのは、全然文学に関係のない会社でございまして、会社の仕事は、もう私に全くプラスになるようなものではないです。まったく異質のものでございますけれども、編集関係の仕事をしておりました関係で、実にこの時たたくさんの人をインタビュしたり、それからいい先生にめぐり逢えたりして、私はこの時、人の知りあいを得たということは、私の大きな財産になったと思っております。その中で野田宇太郎さんという、ご存じの方がいらっしゃるかと思いますが、文学散歩をよくおやりになる先生で、この先生のもとに毎月、私が原稿依頼にお伺いしているうちに「私家版」という本のあることを教えられたわけなんです。野田宇太郎さんという方は、日本の近代文学史を成蹊大学などで講義しておられる、そういう学者であること以外に詩人でもあったわけですね。それで昔は、編集者でもあったわけで、先生の本棚を見ますと「私家版」というふうなものがたくさんある。先生は御自分の詩集がたまるとにお金を作って自分で、それをきれいな本にして出版をしていらっしゃるわけです。先生のを見ますととも、きれいな本がたくさんあるんです。いろんな形の本があるんですね。本といえますのはこういうふうになんとてある物ばかりかと思えますと、野田先生の家で見ましたものは色紙を重ねたようなもの

ので全然とじてないものとか、それから「帙」といまして、カバーがくるりとまわってきれいな布張りのものもあつたり、そういうようなものをみせていただいたわけですね。私はその時まで全然自分の著書をもっておりませんでしたので、野田さんの本をみまして私も非常に自分の本が欲しくなったわけなんです。それで野田さんはちょうど名古屋の明治村の理事をしておらまして、その明治村は出版もしているわけなんです。明治村版といういろんな複製版がございまして、その中には森鷗外の「文づかひ」だとか、夏目漱石の「吾輩は猫である」とか、そういうふうなものを昔どりに復刻して、明治村版として出しているものがございまして、その時夏目漱石が使ったペーパーナイフまで同じようなものを作ってそれに添えて出しているのを見まして、私本当にうらやましいと思つたのでございます。そこでこれと同じものを作りたいと思つたわけなんです。それで私が目をつけたのは、その森鷗外の「文づかひ」という本のスタイルだったわけでございます。でもこの私家版を作るにあたりましては、大変お金がかかるんです。で、本屋で見積つてもらいますとだいたい百万円ということになりました。百万円といえますと私が勤めておりました当時の給料のほとんど一年分でございます。でも私考えてみますと手元に「權」という作品がある。これはもう本当に自分の手塩にかけて土曜日ごとに一生懸命一生懸命書いて来たものだから、これをぜひ出したいと思つたわけです。で第一部は、こうして作りました私家版が実を結んで受賞いたしましただけに一生懸命に書いた私にとっては本当に思い出多い作品になると思っております。

(昭和四十八年十一月三十日文芸学会講演・筆録荒牧ゼミナール)